

〔研究ノート〕

グアテマラ・コーヒーと山間部のマヤ系先住民たち 共同体への栽培導入をめぐる政治社会学的考察

中田 英樹 (HIDEKI NAKATA)

京都大学大学院

はじめに

近年グアテマラでは、中西部山岳地帯のいくつかの地域でコーヒーの零細栽培が展開しつつある。もとより、この展開という概念(以下、《展開》と表記)は、国営コーヒー協会(ANACAFE: Asociación Nacional del Café、以下、アナカフェと表記)などの農政関係者による報告書において指摘され出したものであり、目下もっぱら“国内コーヒー産業の発展”や“グアテマラ経済の発展”という文脈で使われている(ANACAFE 1995a; 1995b)。

一方、マヤ系先住民を対象とする研究は20世紀半ば頃からなされてきた。そして、“マヤ系先住民はコーヒー栽培を共同体に導入していない、トウモロコシ栽培が中心の自給生活”という彼らの文化(以下、《トウモロコシ文化》と表記)が確固として存在する、と見なされてきた。ところが、先述のように《展開》が指摘される地域のなかには、マヤ系先住民のコミュニティにおいて、先住民自身の手でコーヒーが栽培されている地域もある。したがって《展開》という概念は、全面的ではないにせよ先住民による《トウモロコシ文化》という実態を否定するものになるのだが、現実の《展開》に関する

記述では、このようなコーヒー栽培地域についての歴史的文脈は踏まえられていない。

こうしたコーヒー零細栽培の《展開》という概念は、《トウモロコシ文化》の担い手としての先住民像に再検討を迫ったり、変更を求めるものではない。先住民が換金作物に依存するようになったとか、先住民はプロレタリアート化し先住民共同体社会も資本主義社会化した、というように説明するだけで済まされるものではない。事実、《トウモロコシ文化》は、先住民をコーヒー大農園へ強制労働に駆り出すような歴史とともに形成され維持されてきたのである。さらに言えば内戦期において、先住民 = 《トウモロコシ文化》の担い手という図式は、先住民が伝統的な共同体に暮らす「遅れた」人びとであるという見解から、軍や政府が、彼らを一括りにしながら国内の左翼ゲリラと同一視するような事態につながり、先住民に対する残虐行為を正当化してしまうに至った¹。内戦が「終結」

¹ 真相究明委員会 (CEH: Comisión para el Esclarecimiento Histórico) は、内戦での残虐行為の責任を追及していくなかで、次のような結論に至っている。

左翼ゲリラと軍の対立が激化した1978年から1983年にかけて、ゲリラへの支援基盤と活動能力が拡張したことと相まって、国内のさまざまな地域で、軍はマヤの人たちをゲリラと同類のグループだと見なしていた。ほとんどの場合において、マヤのコミュニティを反乱者集団

した現在のグアテマラ社会でも、先住民への支配的な関係は様相を変えて持続する。とするならば、こうした《展開》を《トウモロコシ文化》と突き合わせるには、民族学的かつ農村社会学的な実証研究だけでなく、被抑圧的な歴史を生き抜いてきた先住民たちに対する政治社会学的な観点についても、十分な配慮が払われなければならないだろう。

先住民たちはコーヒーと、一体どのような歴史的關係を結んできたのだろうか。またその關係性のなかで自らが暮らす共同体をどのように変化させてきたのか。言ってみれば、《トウモロコシ文化》がいかなる歴史的文脈のなかで展開されてきたのだろうか。もちろん、こういった点を問いかける諸研究（以下、《研究》と表記）は、人類学、民族学、歴史学、農村社会学などのさまざまな分野で多種多様に存在している。ただ本稿では、《トウモロコシ文化》に関する最も基本的な言説だけを紹介するにとどめざるをえない。また他方で、《展開》については現地の一次資料も不足している。だがそれでも、両者を突き合わせることで生ずる諸問題は、現在ないし今後の先住民諸問題に新たな議論を持ち込むものだとして筆者は考えている。

本稿の構成は次のとおりである。まず1.で、グアテマラにおけるコーヒー栽培の導入過程とその確立の歴史を概略し、次いで具体的な《研究》の中身を紹介する。それから、“《トウモロコシ文化》が現前する”という状態が、“先住民共同体が維持されている”という命題を成立させる必要条件である、と《研究》では見なされ

てきたことを示したい。

ところで20世紀後半に内戦が激化すると、関連の《研究》では、コーヒー栽培と關係付けて先住民共同体を取り上げることはまれになった。内戦で土地を離れざるを得なくなった先住民たちの現状の方に、関心の的が移ったためである。一方で暗黙の了解とされるのは、被害を免れた先住民たちが依然として《トウモロコシ文化》のなかで暮らしている、という視点だろう。だがここで無視できないのは冒頭に述べた《展開》の内実である。そこで2.では、コーヒー零細栽培の《展開》という概念を指摘したアナカフェの報告書を紹介したい。さらに、《展開》が生じている地域と見られるある村については、筆者が現地で見聞した事柄について断片的な補足を付け加えたい²。もっとも、《研究》に関する現下のフロンティアに照らせば、こうした《展開》の中身について議論することで、いかなる問題が生まれ、またいかなる論点が要請されるのだろうか。終節では、この点に関する筆者なりの見解を述べようと思う。

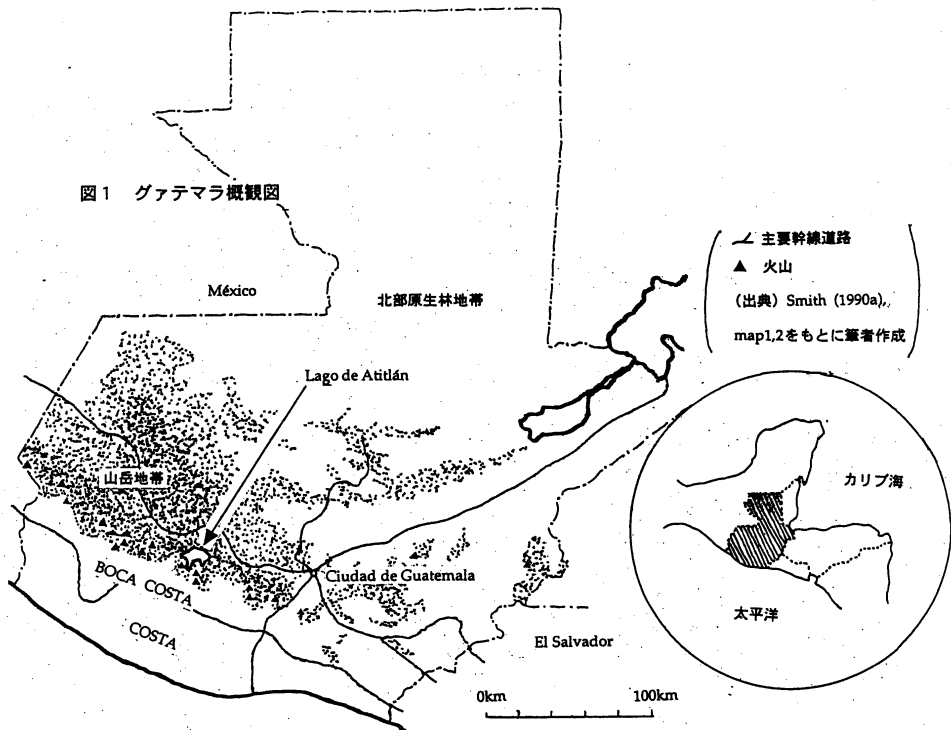
1. グアテマラ・コーヒーの「歴史」

まず本稿が対象とする地域の範囲を明確にしたい。グアテマラは地形や気候、あるいは農業形態や住民の生活様式などによって、大まかに4つの地域に分類されるが³、ここでは、原生林が広がる北部と、主として非先住民系の人びとが暮らす東部とを射程外に置くことにする。その代わり次のように、大農園が広がる南部平野地帯と、火山が連なる中西部山岳地帯の2つに、

と同一視することは、国家によって意図的に誇張された行為だった。人種主義者たちが以前から抱く偏見も加わり、人びとがどんな反乱計画に参加も支援もできないように、その可能性を今後一切排除しようという国家の思惑に役立ったのである（CEH 1999:29）。

² 本稿における聞き取り調査の実施期間は、1999年5月-1999年7月、1999年10月-2000年3月、2001年1月-2001年3月の各期間である。

³ これは「4万2000の小さな領域をもつグアテマラは、基本的な特徴をもつ3つの地域に分割することができる（Smith 1990a:6-7）」という、スミス手法に倣っている。



対象地域を限定しよう(図1)。

<南部>: 中部を横断するシエラ・マドレ山脈以南には、海岸に向かいなだらかに下って行く平場が広がる。上半分をボカ・コスタといい、下半分の標高の低い海岸部をコスタという。いずれも大規模栽培の諸条件を満たしており、グアテマラ輸出農業の重要な地域となってきた。今日、ボカ・コスタではコーヒーのプランテーションが、またコスタでは綿花、サトウキビなどのプランテーションがそれぞれに広がる。それらの所有者はほとんどが非先住民である。アナカフェなどの農政関係者や農業経済学者が研究対象としてきたのは、主にこれらの農業地帯である。

<中西部山岳地帯>: ボカ・コスタ以北で、首都グアテマラ市以西は、標高2000-3000メートル級の火山が33も点在する山岳地帯である。多くの地域でマヤ系先住民の比率が9割をこえ

ている(INE 1996)。土地は傾斜し、トウモロコシおよび豆類など先住民たちの自家消費用の作物が今日に至るまで栽培されてきた。

(i) グアテマラ・コーヒーの「開花」

では次に、こうした地域区分を踏まえて、グアテマラ・コーヒーの導入過程を概観しよう。グアテマラにコーヒーが持ち込まれたのは1773年だといわれるが(ANACAFE 1995a:2)、広く普及したのは1850年頃であった。それは主に2つの要因から説明されている。1つは、それまでもっとも主要だった輸出品目、つまりインディゴやコチニールといった天然染料が化学染料の台頭によって決定的な打撃を受けていたこと。もう1つは、コスタ・リカがコーヒー経済の絶頂期を迎えた状況を、グアテマラ人が横目にみていることである(Mosk 1958: 162-166; McCreery

1994: 161-162)。

天然染料の生産地帯は、首都およびアンティグア市の近郊に限られていた。つまり南部平野地帯は、輸出作物の生産に利用されることはほとんどなく、スペイン系支配階層の庇護下でマヤ系先住民の共同体が広がる地域だった (McCreery 1994:163; 1990:104)。19世紀半ばにかけて徐々に形成された資本家層がコーヒー産業に目を付け、南部を大規模農場地帯にすべく資本主義的な転換を意図したのだが、当時政権を握る保守派カレラは、むしろ教会など既存の支配階級の利益を保護した。つまり旧支配階層は広範な土地と課税対象たる先住民を抱え、封建的な生産様式を温存させ続けたのである。それゆえ、コーヒー資本主義が十全に展開するために必要な土地や労働力の流動化は生まれず、現状に対する新興農業資本家層の不満は絶えなかった (McCreery 1990:97-101)。

こうした状況で政権を執るバリオスは、逆に、旧支配階層と真っ向から対立し、いわゆるリベラル改革と呼ばれる、グアテマラ農業の徹底した近代資本主義化に着手した (Cambranes 1992:314)。政権を執るや彼は教会所有地の接収 (1873年)、先住民の永代借地契約の破棄 (1877年)、多くの未開墾地の売買対象化などを断行した。そして、山間部に多くが暮らす先住民を強制労働へ徴収することを、農園主に認めたのであった (Cardoso y Pérez 1977:216-218; McCreery 1994:161-194)。

(ii) 従来の《研究》における先住民《トウモロコシ文化》の扱われ方

とはいえバリオスは、南部地域に限定してこれら諸施策を考えたのではない。では、先住民共同体が広がる山間部ではどのような変化が観察されたのだろうか。後の時代から見れば、

(山間部で)「リベラル政権は共同所有を『廃止』 (“abolish”) したり『違法化』 (“outlaw”) したりはしなかった (McCreery 1990:106)」のである。むしろ、そうはできなかったと言ってよい。マンガミエント (強制労働システム) がなぜ「不成功」に終わったのか、そのことを例に取ってみよう。

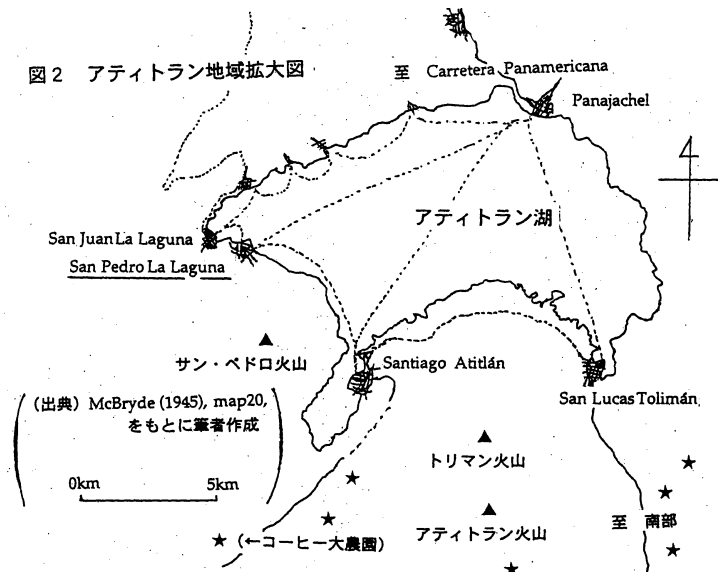
1890年頃に至っては、マンガミエントで要請された数を徴募することは困難か、不可能だという内容の報告が日常化していた。中略 (内はすべて筆者) セイラン Ceilan⁴ の大農園は、コマラーパ Comalapa 中央部山村に1896年マンガミエント徴募のために支払いを済ませていたが、翌年11月になっても誰も連れて来ることはできなかった。中略 サン・ルーカス・トリマン (図2参照) でも1914年に、こうした内容の報告がなされている。

中略 1918から1919年にかけて、つまりカブレラがその政権掌握の力を弱めていた頃、大農園主層から不満の声が新聞に掲載され始めた。マンガミエントは非経済的であり大農園主層や輸出経済を損なっている、という不満がそれだが、そのシステムはあと数年は続くこととなっていた (McCreery 1994:222)。

《研究》に描かれる《トウモロコシ文化》に関しては論者で差異はあるが、彼らの間で一致した見解をあげれば、おおむね次の点だろう。それは、先住民たちがコーヒー資本主義に取り込まれずトウモロコシ栽培を守り続けてきた、という内容の歴史記述である。

先住民の共同体を解体し、そこに住む人びと

⁴ 英語の原文では Ceilan となっているが、文脈から判断すると、中南部サカテペケス県ボカ・コスタに位置し、大農場がある Ceylán のことを指すと思われる。



を南部農業地帯での労働資源として囲い込もうというバリオスの思惑は、その後政権が変わっても達成されることはなかった。つまり、多くの先住民たちは自らの共同体を離れるのではなく、季節労働者として年間数ヶ月だけ現金収入を得るために南部へと出かけていくようになったのである。結果的にこうした状況は農園主側にも好都合だった。なぜなら、農園内に住み込ませて労働力を再生産させる方法よりもその方が安くついたからである。先住民たちがトウモロコシや豆類の栽培という従来からの自給生活を基盤としているため、彼らに必要な現金収入は低いまま維持されてしまう。つまり賃金を上げるという要求は高まらない。プランテーションで僅かばかりの現金を得てから先住民は自らの共同体で過ごすため、彼らの労働力を再生産させるための費用を農園主は払わなくてもよかったのである。さらに、積極的に先住民の生活を変化させようという働きかけは少なかったため、コンフリクトが起こる可能性を大幅に回避できたからでもある (McCreery 1994: 265-294; Smith

1990:259-263; Cardoso y Pérez 1977: 226-229, 231; Cambranes 1986: 204-212)。

先住民を債務超過で農場に縛り付け労働させるというこのシステムは、1934年、ウビコ独裁政権下で撤廃された(法令第1995号による)。代わって、一定の土地を持たない先住民に対し、一年のうち決まった日数を大農場(多くはコーヒー農園)で働くことが義務づけられ、各々が持ち歩き労働記録が記入された帳面によって、それが厳重に管理された(Adams 1990: 141-143)。このことは事実上、強制的に先住民を共同体から引き剥がし南部のプランテーションへと恒常的に囲い込むとことが、至上命題ではなくなったことを意味していた(Handy 1994:10)。コーヒー資本主義システムのなかでいかに効率よく先住民労働力を活かしていくのか、という最終目的から逆に考えれば、共同体に残しつつも先住民を季節労働者として適宜利用できればそれでよい、と資本家側が追認したのだともいえる。

ウビコ独裁後のグアテマラは、アレーバロやアルベンス大統領に代表される革命政権の時代

(1944-54)に入った。(大土地所有者層から一定面積以上の土地接収を定めた)法令第900号による農地改革など、きわめてドラスティックな諸改革が執行された。しかしそれでも、既存の社会構造を持続的に変えるものとはならなかった。

1871年にパリオスが導入した経済システムあるいは国家の性質(the kind of the State)は、1944年までほとんど変化なく継続された。中略 1944年から1954年までの期間はしばしばグアテマラの春の10年と呼ばれる。数多くの重要な社会経済的改革がもたらされたが、次に来る軍隊支配の時代にまで生きながらえたものはほとんどなかった(Smith 1990b: 263)。

カリブ海側にアメリカ合衆国の巨大バナナ資本、ユナイテッド・フルーツ社がもつ大農場は、1952年、改革主義的政権による農地改革で徹底的な打撃を受けた。しかし、アメリカ合衆国が裏で糸を引く反政府組織により、2年後の1954年にこの政権が崩壊を余儀なくされ、その後グアテマラは、20世紀末まで続くことになる軍隊支配の時代に入った。

束の間の「春」が過ぎ去った1960年代において、従来《トウモロコシ文化》として描かれてきた先住民の暮らしに何か変化はあったのだろうか。ここで、キチェ県出身の先住民女性、リゴベルタ・メンチュウの著作を取り上げてみよう。彼女は自らの幼少時代を次のように語っている。現在の年齢から逆算すれば、それは1960年代頃のことになる。

小さいときからいつも山から農場へと降りていっていました。4ヶ月は山間部の小さな我が家で過ごし、残りの月は海岸地方で過ごさなければなりません。それはコーヒー

園のあるボカ・コスタでの、コーヒー摘み取りや精製であったり、綿花農園のあるコスタでのそれらでした。それは私たちの何にもましての働き口でした。広大な土地には、とてつもなく多くの家族が困わっていて、そこでは外国へ売る作物が作られていました(Burgos 1985:26)。

以上が、国内外を問わずさまざまな人びとが行ってきた先住民たちの描写、それも19世紀末から20世紀半ばまでを対象とする状況の描写である。これを見ただけで、コーヒーを排除して伝統的な共同体のなかで《トウモロコシ文化》を育ててきたのが先住民に他ならない、といった観点が広く共有されてきたことがわかって。

ところで、1970年代から80年代へと内戦が激化するなかで先住民たちが生き抜かねばならなかった数々の悲惨な経験は、周知の通りである。多くの先住民が内戦のせいで共同体を後にし、国内・国外難民となるなど、彼らを取り巻く状況は大きく変化した。もはや農業をするどころではなく、生き延びることすら精一杯だという状況に、彼らの多くが追いやられていた。そして、コーヒーとの関係を中心に先住民が取り上げられることは、きわめて希になっていった。誤解を恐れずに言えば、そうしたことが“二次的”になったとでも表現できようか。内戦が沈静化した1990年代後半以降も、状況は変わらない。というのも戦後は、内戦期のいわれなき拉致、拷問、虐待、処刑などに対する責任を追及し、被害者たちと向かい合うという課題こそ、何よりも早急に取り組まねばならないと言われたからである。そうした学術面での潮流に疑問を挟むつもりは毛頭ない。

だが同時に筆者が目じりたいのは次の点である。つまり、先住民の《トウモロコシ文化》が

相変わらず維持されていると（暗黙に）見なす傾向に対して、冒頭に触れたが、これに変更を迫るようなコーヒー零細栽培の《展開》を指摘する見方が存在するという点である。

2. 20世紀のグアテマラ・コーヒー産業

不安定な大規模生産から高品質戦略へ

(i) コーヒー小国、グアテマラ

既に第一次世界大戦頃、コーヒーは今日見られるような様相を呈していたと言われる (Mosk 1958:161)。20世紀後半を通じ、コーヒーの輸出は最高値で国家収入の約50%を占め、平均的にいってもその約30%をもたらしてきた (ANACAFE 1995a:74)。ボカ・コスタにある主要産出地帯の4つの県で国内産出量の約60%を占め、それらの地帯では大規模経営による産出高は9割に達する (ibid: 93-105)。つまりグアテマラ経済はコーヒーに依存してきており、コーヒーは大規模プランテーション経営に立脚してきたのである。

とはいえ、こうした国内経済の「大黒柱」が意外に脆弱だという認識は、既にバリオス時代から存在し、それゆえ、コーヒーのモノカルチャーを避けるべく、サトウキビなど他作物の栽培も推進されてきた (Cardoso y Pérez 1977: 272)。その奢侈性ゆえコーヒーの国際価格はきわめて不安定である。人口約1000万人強のグアテマラは、ブラジル、コロンビア、インドネシアなどに次ぐコーヒーの産出国なのだが、それでも国際市場におけるシェアは4-5%程度にとどまる (ANACAFE 1995a: 21)。それだけに、上位のコーヒー産出国における生産状況や、欧米など消費市場の政治経済的な状況の変化がもたらす影響は、この国にとって甚大である (ibid: 42-45)。とりわけ1990年代初頭以降の価格低迷期

に、こうした問題が深刻化した。だからこそ、次に見るように、山間部での小規模栽培による高品質化という路線に、アナカフェは注目したのである。

(ii) 山間部での零細栽培への着目

4年前 1991年にコーヒー価格が危機に陥ったとき、唯一の短期的な解決法は生産性の向上しかないと見なされていた。中略 そうした解決法に今日付け加えるべきは、グルメ・コーヒー部門の発展が事態の改善をもたらしてくれるであろう、という解決法である (ANACAFE 1995a: 51)

大規模プランテーションによる量産コーヒーが不利ならば、有効な選択肢は高級ブランドコーヒーであろう。これに値するのはアラビア豆でも厳選された約1割で、それはグルメ・コーヒーとして高い値段で取り引きされる。その産地である中西部の火山地帯は、冷涼だが霜が降りない気候、豊富な雨、湿度、風、地質という諸条件を満たしている。高級なコーヒーを得るには、最も熟した状態の実だけを積み重ねて収穫しなければならない。機械化よりも人の細かい手入れの方が必要とされる (ANACAFE 1995a: 28)。1980年代以降、世界市場で爆発的な成長を続けるグルメ・コーヒー部門。大規模コーヒー栽培ではブラジルなどに太刀打ちできないグアテマラ・コーヒーの可能性が、ここにある。その最たる例がアンティグア市近郊で産出されるコーヒー「純アンティグア (Genuino Antigua)」であり、このコーヒーは地域独特の美味を持つとして、かねてから高い国際的評価を得ている (ANACAFE 1995b: 25-35)。

こうした戦略のもと、アナカフェは1992年

に、アンティグアを含む5つの重点強化地域を選出した。そのうちの2つ、ウエウエテナンゴとアティトランの両地域では、零細栽培でコーヒーが生産されている (ANACAFE 1995b: 53-57; 114-120)。ここでは、アティトラン地域に注目したい。火山に囲まれるアティトラン地域は、土地の水はけがよく、湖があるおかげで精製に不可欠な大量の水にも恵まれている。まさにここは、「グルメコーヒーとして売り出すための、さまざまな好条件を備えている (ANACAFE 1995c: 14)」のだ。95%が零細栽培による (ANACAFE 1995a: 14) このコーヒー栽培は、「地域住民にとって最も重要な仕事であり、75%-90%の家庭がコーヒー農園を持って」いる (ANACAFE 1995b: 55-58)。では、アティトラン地域で先住民たちは、こうしたコーヒー零細栽培の《展開》にどのように絡んでいるのだろうか。

(iii) 「コーヒーの人間たち」

アティトラン地域におけるコーヒー栽培は、サン・ルーカス San Lucas Tolimán、サンティアゴ Santiago Atitlán、およびサン・ペドロ San Pedro La Laguna の3町村で行われている⁵。この一帯へのコーヒー導入は、地理的条件 (図2) からサン・ルーカスが最も早く、既に1940年代頃には、湖畔村落のなかでサン・ルーカスの先住民だけが、50-80クエルダのトウモロコシ畑と20-30クエルダのコーヒー畑を所有していたことが確認されている (McBryde 1945: 95)。サン・ルーカスとサンティアゴではそれぞれ南

⁵ 今日サン・ペドロの隣町サン・ホアンでもコーヒーの栽培が普及している。しかし、サン・ホアンのコーヒー農園の少なくとも半分以上は、サン・ペドロの人びとが所有している。それゆえ本稿ではとりあえず、サン・ホアンのこともサン・ペドロの話に含めた。ちなみにサン・ホアンの人びともツトゥヒル系であり、外から派遣された役人などを除くと、非先住民はほとんど混住していない。この状況については (Paul 1968) が詳しい。

部に大農園が点在し⁶、混住する非先住民の数も多いが⁷、他方サン・ペドロではほとんどの住民が土着の先住民である。この村についてある民族学者は、ひっそりとトウモロコシを自給栽培する「閉鎖的集合農民共同体 closed, corporate, peasant community (Eric Wolf)」であると、20世紀半ばに記していた (Paul 1968: 152-153)。そこで次に、筆者の現地聞き取り調査に基づいて、このサン・ペドロ村の状況を紹介したい。

サン・ペドロに初めてコーヒーが持ち込まれたのは1926年だが (Paul 1968: 99)、筆者の聞き取りを総合すれば、1980年頃には村の隅々までコーヒーの栽培が広がっていたということである。

「7年前(1994年)にこのアナカフェのオフィスができたのです。実は、サン・ペドロには問題があって、以前、アナカフェは、もっぱら大農園にのみ注意を向けていて、零細耕作者はかまっていなかったのです」[アナカフェ、サンペドロ支局に勤務する40代男性の証言]

このようにサン・ペドロは、1990年代後半から、零細コーヒー栽培者で溢れかえるような状況になり、2001年現在では村内全家庭の約90%がコーヒー畑を所有している。筆者の目算だが、農園を所有する家庭の何割かは、コーヒー栽培に加え、観光業や商店経営など他の職業にも従事しているようだ。

⁶ 1979年の農業センサスに基づく FUNCEDE シリーズの統計に拠れば、2マンサーナ(約3.4エーカー)までの小農園と、1カバジェリア(約45ヘクタール)以上を有する大農園について、各町の特徴をまとめれば、サン・ペドロでは490の小農園が全耕地面積の82%を占める一方、サン・ルーカスとサンティアゴでは、この数値はそれぞれ6%および21%に過ぎないが、両者における大農園の面積占有率は88%および64%ときわめて高いものとなっている (FUNCEDE 1997a; 1997b; 1997c)。

⁷ 1994年のセンサスにおける非先住民人口は、サン・ルーカスが1万5676人中1506人、サンティアゴが2万3303人中873人、そしてサン・ペドロが7289人中139人となっている (INE 1996)。

サン・ペドロでは、プロテスタント福音派(エヴァンヘリコ)が村人の約4割から支持を受けており⁸、伝統的なカトリックが作りあげる宗教ヒエラルキーと社会組織が一体となった信徒集団(cofradía)はもはや形骸化している。信徒集団に付随するさまざまな慣習的活動もほぼ姿を消した。この村では、伝統的な生活様式を守り続けていると思えない側面が多く存在する。子どもをスペイン語で育てる家族が現れ、トウモロコシは買うものにさえなった。サービスが少しでも整った学校にこぞって子どもを通わせ、「ある家が二階建てにすれば隣は三階建てにしたがる。サン・ペドロの間は競争が好きなのだ」[安宿を経営する40代先住民男性の証言]。ここ数年でスペイン語を観光客に教える学校が3つ、4つと増加し、ホテルでは従来のレートの2倍、3倍の値段(10US\$ / 日以上)の豪華な部屋備えたものが次々と建ち始めている。通貨量は増える一方で、物価も上昇し続けている。サン・ペドロのある男[日雇い労働者の40代の先住民]は言う。「サン・ペドロは豊かだ。観光もある。学校もある。これらすべてはコーヒーの周りを廻っているのだ」。

本稿で注目してきたコーヒー零細栽培の《展開》は、サン・ペドロでは前述のとおりである。アティトラン地域、ことサン・ペドロに関しては、トウモロコシの共同体というよりは「コーヒーの共同体」といった方が、はるかに実態に近いものとなっている。しかし《展開》に関する従来の指摘においては、奇妙なことに、アティトラン地域でコーヒー栽培にたずさわるこれらの人びとが《トウモロコシ文化》を歴史的に担っ

てきた先住民たちであるという事実は、全く言及されていない。

ここで指摘した「不踏襲」というべき研究の現状では、“より儲かるから人びとはコーヒーに乗り出したのだ”という言説が示すがごとく、コーヒーの零細栽培に乗り出した先住民たちを合理的な経済主体に還元してしまうような硬直化した解釈へと、われわれは導かれかねない。しかし、先験的かつ非歴史的な視点から経済人(ホモ・エコノミクス)を措定し、前述のような現状は経済人による生活改善の試みにすぎないと片付けることは、問題である。われわれに不可欠なのは、これまで見たコーヒー零細栽培の《展開》を、先住民がたどった歴史的な文脈のなかで考えること、そしてそうした歴史的展開の実態をグアテマラ現代社会の状況のなかに置いて考えることであろう。

おわりに 「トウモロコシの人間たち」の戦略の本質主義

以上ような観点から、どのような問題が現れてくるのか。つまり、従来の《研究》は先住民たちを描く際に《トウモロコシ文化》を前提にしてきたが、この《トウモロコシ文化》に、前述のようなコーヒー零細栽培の《展開》という面を突き合わせるならば、そこからいかなる論点が浮上するのだろうか。最後に、この点について考えてみたい。

周知のように、先住民が歴史的に維持してきた《トウモロコシ文化》を単純に裏返しするような見解が、しばしば提起されている。言い換えれば、トウモロコシ栽培などの共同体的生活様式を論拠にして先住民《トウモロコシ文化》を本質化し、そこへのコーヒー栽培の浸透を資本主義の浸透プロセスとして描くような見解である。前資本主義的な共同体社会から資本主義

⁸ プロテスタントの導入は1940年頃だといわれている(筆者による現地聞き取り)。プロテスタントの浸透がもたらす共同体生活への影響は、もちろん重要だが、本稿では十分に取り上げることができなかった。この点については(Nathalie et Aubrit 1997)が詳しい。

的な社会への移行。つまりそれは、資本主義経済の影響が強まるなかで、先住民たちがトウモロコシからコーヒーへと転作したのだ、という解釈である。

だが、外部の者たちがこのような形で、資本主義に侵食された犠牲者として先住民を捉えたり、あるいは、先住民が“経済合理的な主体として積極的に転化しつつある”という見方から、これまでの伝統的な先住民像に代わる新たな主体性を“コーヒー資本主義の犠牲者”のなかに見出すことは、きわめて大きな問題を孕んでいる。なぜならそうした見方は、先住民が自身を伝統的なマヤとして規定することそのものを否定しかねないからだ。この点に関連し、例えばメンチュウは述べている。

トウモロコシとは、あらゆるものの中心であり、私たちの文化なのです (Burgos 1985: 77)。

コーヒーを飲む習慣はない。トウモロコシでつくったアトル、これが私たちの飲み物なのだ (Burgos 1985:165)、とメンチュウは言うのである。このような先住民としての彼女の発言は、かつての習慣を紹介することと同じでは決していない。自分の言語ではない「支配者」の言語でメンチュウは語り、これを受けて、先進国で活動する人類学者ブルゴスがメンチュウの自伝を書いた。語るということが、自分でも制御不可能なものとして自分の言葉を解き放つことに他ならないと、メンチュウは知っている。メンチュウが語りという行為をこのかくも危うい戦略に賭けたのは、一人の犠牲者として本質化されてきた、先住民女性という表象のゆえなのである。そしてこの「本質」を鋭く支えるのが、本稿で確認したように、先住民とコーヒーの関係史のなかで維持されてきた《トウモロコシ文化》で

あり、その《トウモロコシ文化》のもとで育まれてきたマヤ系先住民の文化なのである⁹。

だからこそ、こうした《トウモロコシ文化》の歴史的展開は、今日の先住民にとって重要性をもつのだ。先住民として被支配的な関係性を生きざるをえない状況のもと、コーヒー栽培を非先住民文化として分節すること。また、その合わせ鏡として、トウモロコシを自らの文化として規定すること。このような構図のなかで、支配的な関係を少しでも解きほぐそうとするたたかいそのものが、《トウモロコシ文化》の歴史的展開という言説なのである。

本稿で取り上げたように、コーヒーの零細耕作地が広がるのはアティトラン地域であって、そこがむしろ、メンチュウが暮らしたキチェ県よりも南部コーヒー地帯に近いことは、明らかである。したがって前者では、コーヒー資本主義の浸透力も強く、コーヒーに転向する先住民たちが多く存在するかもしれない。だが、このように差異を地域差に還元させる解釈、つまり先住民が一枚岩でなく多様化の過程にいと見

⁹この著作を日本語する段階において、(読者の一人である)翻訳者の特権的な「読み」が働いたこと、そしてその「読み」は、本稿で扱うトウモロコシに関してメンチュウがたてた「マヤ文化」そのものを、暴力的に解体するものである。この点は、次の引用文から確認できる。

「作品を読まれた方々は前後でいくつかつじつまの合わぬ箇所に出くわされたにちがいない。例えば、コーヒーを飲むとか飲まぬとか、中略 コーヒーについてはおそらく「ピノル」というコーヒーもどきの飲みものを指してそう呼んでいる場合もあるだろう。中略 一週間で一気に語られたものであることをまず考慮すべきだろう。中略 いずれにしても二十三歳という若さである。」(傍点原著者)(高橋早代「翻訳ノート」『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』新潮社、1987年、325-326頁)

「歴史的客観的事実」を絶対的参照項にして先住民のひとびとの声を裁断するようなことこそ、マイノリティとともに何かを考える際に、外部者としてのわれわれがまっ先に避けなければならないことである、と筆者は考える。「事実」を「歴史的客観的」なものへとつくりあげる力そのものが、先住民の声を押し潰してきた暴力的な力だからであり、また、メンチュウの異議申し立てとは、「客観的事実」の「歴史」から常に彼(女)らが排除されてきたことに対する批判だからである。詳しくは(崎山1998)を参照されたい。

なす解釈は、問題である。また、同じ地域に住む先住民の話を、資本主義の影響を受けた伝統的な先住民が部分的ながら経済合理化する過程として解釈することも、同様に問題である。それが「マヤ系先住民」というものの多様なないし異種混濁化であるとして、そうした差異を無視できるはずはないのだ。問題の根はきわめて微妙なところにある。多様な先住民一人ひとりが現在進行形で向かい合う不正義そのものが、彼らを先住民として一枚岩的に括りあげようとする外部からの強固な眼差しに由来しているからである。多民族国家の存在も多元的な社会の存在も認めず、本質主義的な観点から先住民を一括りのまま対象化し、統制しようとしたのがグアテマラの近代史である。そして、経済政策を通してではなく、制御不可能な暴力を手段として繰り広げられてきたのが、先に「終結」したばかりの内戦であろう。そのうえ今日では、経済再建に奮闘するグアテマラ政府は観光産業の振興に一層の力を注いでいる。依然としてその目玉商品になるのは、一括りにされた「マヤ文化」に他ならない¹⁰。

したがって少なくとも、外部からの本質主義的な眼差しの存在にもかかわらず、同じく外部者であるわれわれが「学問的正当性」でもって、先住民がたてる本質主義を解体しようなどとするならば、極めて問題だと言わざるをえない。コーヒーを排除した文化という形で、トウモロコシ文化を本質主義的にたてているのが、先住民自身の戦略であるとき、その戦略は何に対する、また何を獲得せんとするものだろうか。この問

いから、すべてが始められなければならない。

先住民たちは新たな局面でたたかいは始めている。それは、「マヤ文化」を規定しようとする覇権をめぐるの、全面的なたたかいなのである。メンチュウの自伝が広く知れ渡ったということは、このような新たなたたかいの開始を告げる象徴的な出来事である。その渦中で、山間部における強力な現金収入手段としての「赤いダイヤモンド」は、「マヤ文化」とどのような関係を結び得るであろうか。こうした状況においては、学問を媒介に「こちら側」からいかに呼応していくかという、その関係のあり方が問われている。

参考文献

- ANACAFE. 1995a. *Hombres del Café*. Guatemala: ANACAFE.
- . 1995b. *Caracterización de los Cinco Cafés Regionales de Guatemala*. Antigua, Atitlán, Fraijanes, Cobán y Huehuetenango. Guatemala: ANACAFE.
- Adams, Richard N. 1994. Ethnic Images and Strategies in 1944. In Carol A. Smith, ed. *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*. pp.141-162. Austin: University of Texas Press.
- Burgos, Elizabeth. 1997. *Me Llamo Rigoberta Menchú y Así Me Nació la Conciencia*. 14a ed., México D.F.: Siglo veintiuno.
- Cardoso, Ciro F. S. y Héctor Pérez Bringoli. 1977. *Centroamérica y La Economía Occidental (1520-1930)*. San José: Editorial de la Universidad de Costa Rica.
- Cambranes, Julio Castillanos. 1986. *Introducción a la Historia Agraria de Guatemala 1500-1900*, Guatemala: Serviprensa Cen-

¹⁰ 農村開発財団 (FUNRURAL: Fundación para el Desarrollo Rural) は、近年、コーヒー栽培地を訪ねる観光客向けのツアーを組んだ。グアテマラ国内のあちこちに広がるコーヒー栽培地を訪ねながら、心地よい自然と地域の文化を堪能してもらう、というのが「セールスポイント」である。(http://www.funrural.org/ 2001年11月27日検索)

- troamericana.
- 1992. Tendencias del Desarrollo Agrario en el Siglo XIX y Surgimiento de la Propiedad Capitalista de la Tierra en Guatemala. En J. C. Cambranes, ed. *500 Años de Lucha por la Tierra*, pp.279-347. Guatemala: FLACSO (Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales).
- CEH. 1999. *Guatemala, Memoria del Silencio, Conclusiones y Recomendaciones*. Tomo V. Guatemala: CEH.
- FUNCEDE (Fundación Centroamericana de Desarrollo). 1997a. *Diagnóstico del municipio de San Pedro La Laguna*, Guatemala: FUNCEDE. / 同年同シリーズの Santiago Atitlán 版、San Lucas Tolimán 版、San Juan La Laguna 版をそれぞれ、1997b、1997c、1997d とした。
- INE (Instituto Nacional de Estadística). 1996. *Censos '94, X población-V habitación, Departamento de Sololá, Características Generales de Población y Habitación*. Guatemala: INE.
- McCryde, Felix Webster. 1945. *Cultural and Historical Geography of Southwest Guatemala*, Institute of Social Anthropology, No.4, Washington D.C.: U.S. Government Printing Office.
- McCreery, David. 1994. *Rural Guatemala, 1760-1940*. California: Stanford University Press.
- 1990. State Power, Indigenous Communities, and Land in Nineteenth-Century Guatemala, 1820-1920. In Carol A. Smith, ed. *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*. pp.96-115. Austin: University of Texas Press.
- Mosk, Sanford A. 1958. Economía Cafetalera de Guatemala durante el Período 1850-1918: su Desarrollo y Signos de Inestabilidad. En Ministerio de Educación Pública. *Economía de Guatemala, Seminario de Integración Social Guatemalteca*, Publicación No.6. Vol.I: pp.162-166.
- Nathalie, Fayemendy et Aubrit Christophe. 1997. *La Place du Cafe dans la Communaute Indienne de San Pedro La Laguna Guatemala*, Memoire de Maitrise, Toulouse: Universite de Toulouse le Mirail.
- Paul, Benjamin. 1968. San Pedro La Laguna, En los pueblos del Lago de Atitlán, en Flavio Rojas Lima y Sol Tax. eds. *Seminario de Integración Social Guatemalteca*, (23), Guatemala: Editorial del Ministerio de Educación Pública, pp.93-158.
- 崎山政毅 1998. 「明かしえぬ秘密の《前》に」『思想』890: 57-82 頁.
- Smith, Carol A. 1990a. Introduction: Social Relations in Guatemala over Time and Space. In Carol A. Smith, ed. *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*. pp.1-30. Austin: University of Texas Press.
- Smith, Carol A. 1990b. Conclusion: History and Revolution in Guatemala. In Carol A. Smith, ed. *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*. pp.259-285. Austin: University of Texas Press.